

保育所における保育課程の編成に関する研究

A Study of Formulating Curricula at Nursery Schools

清水益治・小椋たみ子・鶴 宏史・南 憲治

Masuharu Shimizu, Tamiko Ogura, Hirofumi Tsuru, Kenji Minami

要 旨

全国の保育所の20分の1にあたる1115カ所に調査票を送付し、保育課程の編成状況を探るとともに、編成した保育課程を1部提供してもらえよう依頼した。191の保育所が編成状況を探る調査票に回答した。65の保育所が保育課程を提供した。これらを分析し、以下の2つの結果を得た。(1) 保育所保育指針施行後半年の時点では、保育課程を編成している保育所の割合は高くない。編成しているところでも画一的なものが多い。編成時に保護者の意向を把握することや編成された保育課程における保育の内容を評価することは、まだ進んでいない。(2) 保育課程における「言葉」の領域の記述には、適当なキーワードが年齢ごとに存在する。また保育課程の詳細な記述は、その領域における子どもの発達を支援する関わり方をも示すものとなる。これらの結果を保育所保育指針やその解説書の記述、及び保育課程編成の方法に関連づけて議論した。

キーワード

保育課程の編成、保育所保育指針、領域「言葉」

はじめに

現行の保育所保育指針は、平成20年3月28日に改定・告示され、平成21年4月1日から施行されている。今回の改定で大きく変わったことの一つに、各保育所に保育課程の編成が義務づけられたことがある。保育課程の定義は、保育所保育指針には明示されておらず、保育所保育指針解説書(厚生労働省, 2008)からは「これまで「保育計画」としていた保育の全体計画」を改めたもの、「保育所保育の全体像を描き出したもの」、「保育所保育の根幹となる」もの、などと読み取れる。このように法令上の定義は曖昧であるが、編成の仕方については保育所保育指針や同解説書に様々な指定や制限がある。例えば、保育所保育指針には「保育課程は、各保育所の保育の方針や目標に基づき、第2章(子どもの発達)に示された子どもの発達過程を踏まえ、前章(保育の内容)に示されたねらいおよび内容が保育所生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、編成されなければならない」とある。このことから、保育課程には、発達過程に応じたねらいや内容が必ず記されることになる。

ここで述べられている「ねらいや内容」について、著者ら(南, 2008; 小椋, 2008; 小椋・綿巻, 2010 a, 2010 b; 清水, 2009; 鶴, 2005)が興味を持っている「ことば」に関しては、保育所

保育指針の「第3章 保育の内容」に、「言葉」の領域がある。この領域は、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」ものであり、3つのねらいと12の内容が掲げられている。例えば、その「ねらい」には、①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう」といったものが含まれており、「内容」には「①保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする」といったものが含まれている。そこで、各保育所における保育課程について、「言葉」領域に焦点をあてて分析することで、保育所が子どもの「ことば」を伸ばすために、どのように環境を整え、保育士等はどのように子どもに働きかけているかを知ることができると思われる。

本研究の目的は次の2つである。①保育所保育指針施行後半年（平成21年10月）の時点で、保育課程の編成状況（保育所保育指針やその解説書に応じた編成がなされている程度）を調べる。②調査の際に収集された保育課程を「言葉」の領域に焦点をあてて分析することにより、保育所がどのように乳幼児の言葉の発達を捉えているのか、どのように言葉を伸ばそうとしているのかを調べる。本稿では、この目的を達成するために行った全国調査の結果を報告する。

方 法

1. 調査対象 全国の保育所の20分の1を調査対象とした。対象とする保育所の選定には、平成17年度版の社会福祉施設等名簿（厚生統計協会 CD-ROM版）を用いた。この名簿で20番目ごとの保育所1136カ所にメール便を用いて調査票を送付した。21カ所の保育所へは調査票が届かず返却された（廃園や統合等が原因と考えられる）。そのため最終的な調査票の配布総数は1115票であった。

2. 材料 「保育課程の編成に関する調査」と「3歳未満児の「言葉」の領域に関する調査」という2種類の調査票を作成した。本稿で焦点をあてて報告するのは、前者であり、この調査票は①保育課程の編成に関して、保育所保育指針に記載されている内容についてたずねる設問、②保育課程の編成に関して、保育所保育指針解説書に記載されている内容についてたずねる設問、③保育課程編成にあたり要した時間等に関する設問、④当該保育所と回答者の属性をたずねる設問、⑤園の保育課程1部提供の依頼から構成されていた。

3. 手続き 2種類の調査表（後者の調査票は、0歳児用、1歳児用、2歳児用の3部構成としたので、計4部）に依頼文書を添えて、返信用封筒とともに平成21年10月25日に調査対象の各保育所に送付した。平成21年11月16日を一応の締め切りとしたが、園の行事等のことも考え、12月10日までに回収されたものを分析の対象とした。調査票等を返送した保育所の数は203カ所であり、回収率は18.2%であった。

結 果

調査に協力して調査票を返送した203カ所のうち、11の保育所は「保育課程の編成に関する調査」の調査票には無回答であった。さらに1つの保育所は、「保育課程を編成している」かどうかをたずねる最初の設問に対して「いいえ」を選択しながら、「はい」を選択した保育所が答える設問のすべてに答えているなど、矛盾した回答であった。そこでこれら12カ所は分析から省いた。以下では残り191カ所の保育所から返送された調査票を分析対象とする。

1. 分析対象の内訳 保育所の設置主体を、公設、法人、その他、運営主体を、公立、民間、その他から選んでもらった。その結果、設置主体は公設、法人、その他の順に44.0%、53.4%、1.0%（+欠測値1.6%）であり、運営主体は公立、民間、その他の順に41.9%、46.1%、1.0%（+欠測値11.0%）であった。運営主体で欠測値が多い理由について、平成20年度10月1日現在の保育所の施設数（厚生労働省のホームページ—<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/08/dl/kekka-sisetu4.pdf>を見ると）、公営が10935施設、私営が11963施設であった。これに対して同じ表で平成15年を見ると、同じ順に12236施設と10155施設であった。これらのことから、ここ数年の間に、公営と私営の比率が逆転していることがわかる。このように公営から私営への過渡期、すなわち民営化が進んできている最中であり、移管期の保育所が存在することが、運営主体で欠測値が多かった一因であろう。

回答者の園における立場は、主任が57.1%で最も多く、次いで園長が27.2%であった。当該保育所のことをよく分かっている者が、保育課程を編成するにあたり中心になったことを示している。

2. 編成の有無 「保育課程を編成している」という最初の設問に対して、「はい」が選択された割合は94.2%、「いいえ」のそれは5.8%であった。この結果だけを見れば、ほとんどの保育所が保育課程を編成し終えているといえる。しかしながら、調査票の回収率は20%以下と低かった。その原因としては、調査時点で保育課程が完成していなかったことが考えられる。このことは、調査票の送付直後に複数の保育所から、「まだ作成途中なので、調査に協力できない」とか、「公立の保育所で、現在調整中である」などと、お詫びの電話があったことから推測できる。ほとんどの保育所が保育課程を編成し終えているということはできない。なお、近年のこの種の調査では回収率が約40%であることを考えると、保育課程の編成率は、調査票の配布時点で50%程度であると推測できる。

3. 保育所保育指針に基づく編成の状況 表1は、保育所保育指針に基づく保育課程の編成に関

表1. 保育所保育指針に基づく保育課程編成の平均評定値と標準偏差

	N	平均	標準偏差
8 保育課程は、当該保育所の保育の方針に基づいて編成している。	179	5.0	0.6
9 保育課程は、当該保育所の目標に基づいて編成している。	180	5.0	0.6
10 保育課程は、保育指針第2章(子どもの発達)に示された子どもの発達過程を踏まえて編成している。	180	5.0	0.6
16 保育課程は、子どもの育ちに関する長期的見通しを持って編成している。	179	4.9	0.6
18 子どもの発達の連続性に留意して編成している。	177	4.9	0.6
1 指導計画は、保育課程を具体化したものになっている。	180	4.9	0.6
17 子どもの生活の連続性に留意して編成している。	177	4.9	0.6
4 保育課程は、一貫性のあるものとなるよう配慮している。	180	4.9	0.6
13 保育課程は、子どもの状況を考慮して編成している。	180	4.9	0.7
11 保育課程は、保育指針第3章(保育の内容)に示されたねらい及び内容が、保育所生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、編成している。	180	4.8	0.6
2 保育課程は、柔軟な計画になっている。	179	4.8	0.6
5 保育課程に基づいた保育を実施している。	180	4.7	0.7
3 保育課程は、発展的な計画になっている。	177	4.6	0.7
19 保育課程は、創意工夫して編成している。	177	4.6	0.7
12 保育課程は、地域の実態を考慮して編成している。	178	4.5	0.8
14 保育課程は、家庭の状況を考慮して編成している。	180	4.5	0.8
6 保育課程における保育の内容の評価を行うよう努力している。	174	4.4	0.8
15 保育課程は、保育時間を考慮して編成している。	180	4.4	0.8
7 保育課程における保育の内容を評価に基づいて改善するよう努力している。	176	4.4	0.8

して、「全くそうしていない (1)」から「非常にそうしている (6)」の 6 段階で評定を求めたときの平均と標準偏差を、平均値の高い順に示したものである。N (回答者数) が項目によって異なるのは、欠測値が見られたからである。

平均値を見ると、4.4から5.0に分布していた。尺度としては「どちらかと言えばそうしている (4)」と「そうしている (5)」の間なので、多くの保育所が保育所保育指針にそって保育課程を編成しているといえる。

分布を調べたところ、評定の段階が否定的な段階、すなわち「どちらかと言えばそうしていない (3)」以下の割合が10%を超える項目は、6, 7, 12, 15の4項目であった。これらの項目は、保育所保育指針に従って保育課程を編成することが困難な項目である。

次に保育所の設置主体や運営主体によって評定値が異なるかどうかを調べた。t-検定の結果、設置主体、運営主体共に有意な差はなかった。

最後に因子分析を行ってみた。統計ソフトStatistica06Jを用いて、欠測値をケースワイズ削除したところ、有効ケース数は164になった。主成分分析で固有値を見ると、1.0以上が3因子であった。そこで因子数を3、共通性に重相関係数の2乗を指定して主因子法で因子分析を行い、正規化バリマックス回転をかけた結果が表2である。3因子で全分散の55.8%が説明された。第1因子は、全ての保育所に共通する一般的な内容に関する項目が多いため「一般的な編成」の因子と命名できる。第2因子には「〇〇を考慮して編成している」という項目が含まれているため、「各保育所に独自の状況や実態に応じた編成」の因子と命名できる。第3因子は2項目だけであるが、いずれも評価にかかる項目なので、「保育課程の評価」因子と考えられる。

表2. 保育所保育指針に基づく保育課程編成における因子分析の結果

	因子1	因子2	因子3
子どもの発達の連続性に留意して編成している。	0.738	0.347	0.191
保育課程は、当該保育所の目標に基づいて編成している。	0.727	0.315	0.020
子どもの生活の連続性に留意して編成している。	0.718	0.276	0.226
保育課程は、子どもの育ちに関する長期的見通しを持って編成している。	0.712	0.332	0.162
保育課程は、当該保育所の保育の方針に基づいて編成している。	0.711	0.336	0.031
保育課程は、保育所保育指針第2章(子どもの発達)に示された子どもの発達過程を踏まえて編成している。	0.661	0.274	0.058
保育課程は、一貫性のあるものとなるよう配慮している。	0.655	0.077	0.271
保育課程は、保育所保育指針第3章(保育の内容)に示されたねらい及び内容が、保育所生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、編成している。	0.617	0.412	0.159
保育課程に基づいた保育を実施している。	0.590	0.073	0.383
保育課程は、発展的な計画にしている。	0.584	0.142	0.240
保育課程は、創意工夫して編成している。	0.579	0.343	0.286
指導計画は、保育課程を具体化したものになっている。	0.448	-0.052	0.331
保育課程は、柔軟な計画にしている。	0.447	0.190	0.212
保育課程は、家庭の状況を考慮して編成している。	0.185	0.748	0.143
保育課程は、保育時間を考慮して編成している。	0.181	0.697	0.125
保育課程は、地域の実態を考慮して編成している。	0.215	0.681	0.090
保育課程は、子どもの状況を考慮して編成している。	0.486	0.612	0.147
保育課程における保育の内容を、評価に基づいて改善するよう努力している。	0.216	0.247	0.789
保育課程における保育の内容の評価を行うよう努力している。	0.191	0.157	0.803
説明済分散	5.705	2.920	1.990
寄与率	0.300	0.154	0.105

4. 保育所保育指針解説書に基づく編成の状況 表3は、保育所保育指針解説書に基づく保育課程の編成に関して、先と同様に6段階で評定を求めたときの平均と標準偏差を、平均値の高い順に示したものである。表2と同様に、N（回答者数）が項目によって異なるのは、欠測値が見られたからである。また、項目番号5, 6, 7の3項目は、特にNが小さくなっているが、これはそれぞれ延長保育、夜間保育、休日保育を実施している保育所のみが回答しているからである。

平均値を見ると、項目番号30, 6, 7の3項目が3.0以下と低かった。このうち項目番号6と7は、上記のように夜間保育と休日保育を実施している場合に回答する項目であり、保育課程にこれらを含めて構成しているかどうかをたずねる項目である。夜間保育や休日保育の取り組みを保育課程に位置づけるまでには至っていないといえる。項目番号30は、保護者の意向を把握して保育課程を構成しているかどうかをたずねる項目である。保育所保育指針の施行半年では、保育課程を作るのが精一杯で、保護者の意向をたずねるまでには至らなかったことを示していると捉えられる。

表3. 保育所保育指針解説書に基づく保育課程編成の平均評定値と標準偏差

項目	N	平均	SD	項目	N	平均	SD
15 施設長の責任の下に編成している。	174	5.1	0.7	40 子どもの心身の状態に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるように編成している。	177	4.7	0.7
21 人間形成の最も基盤となる時期であることを十分認識して編成している。	177	5.1	0.7	39 子どもの発達の状態に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるように編成している。	178	4.7	0.6
11 保育課程を保育指針に基づき編成している。	177	5.0	0.7	49 特に3歳未満児は、わらわら内容を工夫して組織し、編成している。	179	4.6	0.7
19 乳幼児期の発達の特性を踏まえて編成している。	177	5.0	0.7	50 小学校以降の教育や生活とのつながりを踏まえ、発達の連続性に配慮して編成している。	178	4.6	0.8
3 保育課程の対象を当該保育所の入所児童のすべてとしている。	178	5.0	0.7	46 当該保育所の実態に即して工夫して編成している。	177	4.6	0.8
20 発達の連続性を踏まえて編成している。	176	5.0	0.7	43 具体的なわらわら内容を発達過程に即して組織して編成している。	175	4.6	0.9
1 保育課程を他の計画の上位に位置づけている。	175	4.9	0.8	25 保育所保育の基本について職員間の共通理解を図った上で、編成している。	178	4.6	0.9
52 一人一人の子どもをかけがえのない個性ある存在として認めた上で、編成している。	179	4.9	0.7	54 保育課程を、保育実践を振り返り、記録等を通して保育を評価し見直すという一連の改善のための組織的な取り組みとして位置づけている。	179	4.5	0.8
34 子どもの発達過程を見通した上で、編成している。	179	4.9	0.7	29 当該保育所の子どもを取り巻く家庭・地域の実態を把握した上で、編成している。	177	4.5	0.8
2 保育課程を保育所保育の全体像を描くものとして位置づけている。	177	4.9	0.8	14 児童に関する権利条約に示されていることを踏まえて編成している。	177	4.5	0.9
53 指導計画を保育課程に基づいて展開している。	179	4.9	0.7	12 児童憲章に示されていることを踏まえて編成している。	177	4.5	1.0
32 当該保育所の保育目標について共通理解を図った上で、編成している。	179	4.8	0.8	13 児童福祉法に示されていることを踏まえて編成している。	176	4.5	1.0
4 保育課程を子どもの生活全体をたずねて編成している。	176	4.8	0.7	42 保育課程に基づく保育の経過や結果を省察、評価している。	176	4.5	0.9
33 当該保育所の保育方針について共通理解を図った上で、編成している。	179	4.8	0.8	9 保護者への支援を保育課程に密接に関連して行われる業務と位置づけている。	175	4.4	0.9
44 保育指針や解説書に示される発達過程を参考にして編成している。	179	4.8	0.7	16 全職員が参画して編成している。	176	4.4	1.2
45 保育指針や解説書に示される養護及び教育のわらわら内容を参考にして編成している。	179	4.8	0.8	23 保育課程を当該保育所で積み重ね蓄えられてきた様々な記録や資料などを生かして特色のあるものとしている。	176	4.4	0.8
47 養護と教育が相互に関連して総合的に行われることを考慮して編成している。	179	4.8	0.7	41 家庭の状況に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるように編成している。	178	4.3	0.8
28 当該保育所の子どもの実態を把握した上で、編成している。	178	4.8	0.8	22 保育課程を地域の特性を生かして特色のあるものとしている。	174	4.3	0.9
48 養護と教育が一体となって行われることを十分認識した上で編成している。	179	4.8	0.7	26 児童福祉法や児童に関する権利条約等関係法令を理解した上で、編成している。	175	4.3	0.9
31 当該保育所の保育理念について共通理解を図った上で、編成している。	179	4.8	0.9	37 保育時間の長短に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるように編成している。	176	4.3	0.9
8 保育課程に基づき、保育所における他の計画を作成している。	170	4.8	0.9	10 地域の子育て支援を保育課程に密接に関連して行われる業務と位置づけている。	174	4.2	1.0
35 それぞれの発達過程にふさわしい具体的なわらわら内容と、一貫性を持って組織して編成している。	178	4.8	0.7	38 在所期間の長短に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるように編成している。	177	4.2	0.9
51 保育所の保育が、その子どもが充実感をもって生活できる場であることにより、小学校の生活につながっていることを認識した上で、編成している。	179	4.7	0.7	24 保護者の思いを受け止め、保育課程に繁栄するかどうかを検討している。	175	4.1	0.9
36 子どもの発達過程に応じて保育目標がどのように達成されていくかを見通しを持って編成している。	177	4.7	0.7	5 (延長保育を実施している場合) 保育課程に延長保育を含めて編成している。	150	4.0	1.0
17 全職員の共通理解のもとに編成している。	178	4.7	0.9	7 (休日保育を実施している場合) 保育課程に休日保育を含めて編成している。	23	3.0	1.4
27 保育所保育指針、保育所保育指針解説書の内容を理解した上で、編成している。	179	4.7	0.7	6 (夜間保育を実施している場合) 保育課程に夜間保育を含めて編成している。	15	2.9	1.6
18 全職員の協力体制のもとに編成している。	178	4.7	0.9	30 当該保育所の保護者の意向を把握した上で、編成している。	178	2.3	0.9

他の項目については平均評定値が4.0から5.0に分布していた。尺度としては「どちらかと言えばそうしている (4)」と「そうしている (5)」の間なので、多くの保育所が保育所保育指針解説書にそって保育課程を編成しているといえる。

分布を調べたところ、評定の段階が否定的な段階、すなわち「どちらかと言えばそうしていない (3)」以下の割合が10%を超える項目は、5, 9, 10, 12, 14, 16, 18, 22, 23, 24, 26, 30, 37, 38, 41, 42の16項目であった。これらの項目は、保育所保育指針解説書にそって保育課程を編成することが困難な項目である。特に、この割合が20%を超えていた6項目(5, 10, 16, 24, 30, 38)は困難であった。

次に保育所の設置主体や運営主体によって評定値が異なるかどうかを調べた。設置主体に関しては、t検定の結果、項目9「保護者への支援を保育課程に密接に関連して行われる業務と位置づけている。」にのみ有意差がみられた。公立の保育所(4.6)の方が民間立の保育所(4.3)よりも評定値が高かった。運営主体に関しては、項目「42. 保育課程に基づく保育の経過や結果を省察、評価している。」と「43. 具体的なねらいや内容を発達過程に即して組織して編成している。」で有意差がみられた。いずれも公立の保育所の方が民間の保育所よりも評定値が高かった(順に4.7と4.3、4.8と4.5)。公立の保育所の方が保育所保育指針解説書に忠実に保育を展開しているといえる。

先と同様の方法で因子分析を行ったところ、有効ケース数は132であり、7因子が抽出された(表4)。これらの因子で全分散の69.6%が説明された。第1因子は保育課程の位置づけの因子、第2因子は法令等に関する因子、第3因子は保育目標に関する因子、第4因子は全職員による編成の因子、第5因子は地域と保護者に関する因子、第6因子は保育の内容に関する因子、第7因子は当該保育所における共通理解に関する因子と命名した。

5. 保育課程の分析 保育課程を提供した保育所は65カ所であった。このうち「年間指導計画」のみを提出した保育所が1カ所あった。内容的には他の保育所は「保育課程」という位置づけのものに近いものであったが、「指導計画」と明記されており、「保育課程」と記されていなかったため、分析対象からは外した。調査に協力して調査票を返送した保育所は全部で203カ所であったので、このうち約30%の保育所が保育課程を提供したことになる。

(1) 保育課程の形式

① 用紙のサイズ

多くの保育所がA3サイズで保育課程を編成していた。B4サイズで編成した保育所も見られた。B5サイズの用紙を用いた保育所はなかった。1園だけは、A3サイズの用紙を貼り合わせて、変形サイズの1枚の保育課程を編成していた。

② 用紙の向き

保育課程編成に当たって、用紙を縦に使用して編成した保育所(19カ所)と、横に使用して編成した保育所(44カ所)があった(上記の変形サイズのものは、ほぼ正方形に近かったのでどちらにも含めていない)。

③ 量

A3、あるいはB4サイズ1枚の中に、保育課程のすべてを入れていた保育所が多かった(46カ所)。しかし中にはA3サイズで9枚の保育所もあった(1カ所)。

④ 活字か手書きか

パソコンのワープロソフトなどを用いて、活字で保育課程を編成した保育所がほとんどであったが、中には手書きで編成した保育所もあった。また部分的に手書きを加えている保育所も見られた。部分的な手書きが、本調査で保育課程を提出する直前に「修正」されたものであるならば、編成した保育課程を、保育所によっては自己点検・評価し始めている証拠とも考えられる。

表4. 保育所保育指針解説書に基づく保育課程編成における因子分析の結果

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
保育課程の対象を当該保育所の入所児童のすべてとしている。	0.842	0.036	0.158	0.124	0.112	0.144	0.115
保育課程を他の計画の上位に位置づけている。	0.775	0.142	0.124	0.018	0.112	0.184	0.182
保育課程を保育所保育の全体像を描くものとして位置づけている。	0.754	0.109	0.180	0.218	0.104	0.191	0.151
保育課程を子どもの生活全体をとらえて編成している。	0.706	0.125	0.279	0.173	0.230	0.256	0.039
発達の連続性を踏まえて編成している。	0.704	0.133	0.300	0.189	0.054	0.333	0.139
保育課程を保育指針に基づき編成している。	0.677	0.279	-0.026	0.087	0.252	0.292	0.164
乳幼児期の発達の特性を踏まえて編成している。	0.644	0.232	0.314	0.300	0.013	0.352	0.136
人間形成の最も基盤となる時期であることを十分認識して編成している。	0.609	0.293	0.226	0.224	-0.027	0.354	0.051
施設長の責任の下に編成している。	0.575	0.268	0.051	0.241	0.103	0.348	0.090
保育課程の編成にあたり、保育指針や解説書に示される養護及び教育のねらい・内容を参考にした。	0.556	0.145	0.029	0.149	0.254	0.393	0.384
保育課程に基づき、保育所における他の計画を作成している。	0.540	0.176	0.198	-0.017	0.109	0.098	0.246
保育課程の編成にあたって子どもの発達過程を見通した。	0.537	-0.017	0.423	0.189	0.047	0.437	0.273
保育課程の編成にあたって、保育所保育指針、保育所保育指針解説書の内容を理解した。	0.529	0.306	0.202	0.121	0.361	0.123	0.288
保育課程の編成にあたり、保育指針や解説書に示される発達過程を参考にした。	0.518	0.081	0.029	0.198	0.272	0.431	0.406
保育課程の編成にあたって当該保育所の子どもの実態を把握した。	0.491	0.057	0.249	0.443	0.214	0.399	0.032
児童憲章に示されていることを踏まえて編成している。	0.179	0.873	0.160	0.162	0.135	0.101	-0.008
児童福祉法に示されていることを踏まえて編成している。	0.179	0.859	0.183	0.182	0.161	0.088	0.031
児童に関する権利条約に示されていることを踏まえて編成している。	0.301	0.789	-0.002	0.137	0.229	0.162	0.057
保育課程の編成にあたって、児童福祉法や児童に関する権利条約等関係法令を理解した。	0.172	0.644	0.153	0.074	0.398	0.050	0.197
保育課程の編成にあたって、保育の経過を配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるようにした。	0.155	0.162	0.716	0.115	0.390	0.152	0.178
保育課程の編成にあたって、保育時間の長短に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるようにした。	0.180	0.212	0.669	0.223	0.379	0.113	0.190
保育課程の編成にあたって、子どもの発達の状態に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるようにした。	0.449	0.015	0.643	0.095	0.183	0.237	-0.073
保育課程の編成にあたって、子どもの心身の状態に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるようにした。	0.423	0.010	0.629	0.176	0.153	0.304	-0.027
保育課程の編成にあたって、家庭の状況に配慮して、それぞれにふさわしい生活の中で保育目標が達成されるようにした。	0.181	0.160	0.625	0.115	0.405	0.265	0.097
保育課程を、保育実践を振り返り、記録等を通して保育を評価し見直すという一連の改善のための組織的な取り組みとして位置づけた。	-0.001	0.268	0.467	-0.014	0.344	0.444	0.305
全職員の協力体制のもとに編成している。	0.230	0.171	0.053	0.760	0.171	0.146	0.246
全職員が参画して編成している。	0.145	0.122	0.118	0.695	0.090	-0.004	0.085
全職員の共通理解のもとに編成している。	0.252	0.195	0.176	0.666	0.110	0.284	0.294
保育課程の編成にあたって、保育所保育の基本について職員間の共通理解を図った。	0.119	0.246	0.456	0.473	0.220	0.212	0.225
地域の子育て支援を保育課程に密接に関連して行われる業務と位置づけている。	0.199	0.192	0.300	0.019	0.691	0.006	0.021
入所児童の保護者への支援を保育課程に密接に関連して行われる業務と位置づけている。	0.349	0.104	0.265	0.127	0.688	0.030	-0.126
保護者の思いを受け止め、保育課程に繁栄するかどうかを検討している。	-0.026	0.415	0.303	0.112	0.603	0.197	0.091
保育課程の編成にあたって当該保育所の保護者の意向を把握した。	0.098	0.167	0.101	0.142	0.585	0.202	0.152
保育課程を地域の特性を生かして特色のあるものとしている。	0.092	0.182	0.119	0.323	0.544	0.382	0.015
保育課程の編成にあたって、一人一人の子どもをかけがえのない個性ある存在として認めた。	0.335	0.064	0.161	0.049	0.114	0.650	0.068
保育課程の編成にあたり、養護と教育が一体となって行われることを十分認識した。	0.434	0.065	0.026	0.163	0.317	0.614	0.289
指導計画を保育課程に基づいて展開した。	0.349	0.048	0.258	0.138	0.003	0.610	0.234
保育課程の編成にあたって、保育所の保育が、その子どもが充実感をもって生活できる場であることにより、小学校の生活につながっていることを認識した。	0.376	0.143	0.316	0.167	0.097	0.593	0.084
保育課程の編成にあたり、養護と教育が相互に関連して総合的に行われることを考慮した。	0.489	0.073	0.082	0.133	0.316	0.584	0.258
保育課程の編成にあたって、小学校以降の教育や生活とのつながりを踏まえ、発達の連続性に配慮して編成した。	0.293	0.146	0.309	-0.063	0.095	0.575	0.167
保育課程の編成にあたって、子どもの発達過程に応じて保育目標がどのように達成されていくか見通しを持って編成した。	0.323	0.173	0.536	0.152	0.069	0.537	0.148
保育課程の編成にあたってそれぞれの発達過程にふさわしい具体的なねらいと内容を一貫性を持って組織した。	0.412	0.085	0.475	0.153	0.038	0.535	0.228
保育課程の編成にあたり、当該保育所の実態に即して工夫して設定した。	0.346	0.070	0.132	0.363	0.249	0.517	0.025
保育課程の編成にあたって当該保育所の子どもを取り巻く課程・地域の実態を把握した。	0.108	0.160	0.216	0.419	0.319	0.467	-0.005
保育課程の編成にあたり、特に3歳未満児は、工夫してねらいや内容を組織した。	0.161	0.240	0.451	0.045	0.092	0.459	0.180
保育課程に基づく保育の経過や結果を省察、評価した。	0.259	0.135	0.323	0.229	0.230	0.448	0.170
保育課程の編成にあたり、具体的なねらいや内容を発達過程に即して組織した。	0.409	0.056	0.323	0.289	0.103	0.430	0.238
保育課程の編成にあたって当該保育所の保育目標について共通理解を図った。	0.422	0.061	0.186	0.293	0.055	0.243	0.728
保育課程の編成にあたって当該保育所の保育理念について共通理解を図った。	0.348	0.126	0.197	0.259	0.120	0.288	0.707
保育課程の編成にあたって当該保育所の保育方針について共通理解を図った。	0.439	0.047	0.166	0.282	-0.032	0.240	0.672
保育課程を当該保育所で積み重ね蓄えられてきた様々な記録や資料などを生かして特色のあるものとしている。	0.104	0.311	0.374	0.207	0.356	0.289	0.087
説明済分散	9.166	3.966	5.234	3.591	4.057	6.446	3.074
寄与率(回転前)	0.469	0.070	0.045	0.036	0.027	0.026	0.024

(2) 保育課程に含まれる内容

① 保育所の理念・方針・目標

ほとんどすべての保育課程にこれらは含まれていた。なお含まれていない保育課程も、提出されたものとは、別に記されていると思われた。

理念・方針・目標のうち、目標に関しては二通りの記述が見られた。すなわち、保育所保育指針に記されている保育の目標を踏襲、発展させた記述と、当該保育所がめざす子ども像の記述の二通りの記述が見られた。また子どもの保育目標として、年齢ごとに保育の目標が書かれた保育課程も多かった。

② 社会的責任等

28カ所の保育課程に、社会的責任等が書かれていた。この中には、社会的責任、人権尊重、説明責任、情報保護、苦情処理・解決に分けて書かれていた保育課程が多かったが、これらはほぼ同一の書式のものであった。

③ 発達過程

発達過程（あるいは発達過程とクラスの相関性）として、クラス編成について言及した保育課程が多かった。

④ 保育の内容

年齢あるいは発達過程区分と保育の内容（養護 [生命の保持と情緒の安定]、教育 [健康、人間関係、環境、言葉、表現]、食育等）のマトリクスを作り、各セルに保育の内容として、「ねらい」または「内容」、あるいはそのどちらか一方を示す形で保育の内容が示されていた。ほとんどの保育課程は年齢あるいは発達過程区分を横軸にし、養護や教育を縦軸にしていた。

年齢あるいは発達過程区分の軸では、0歳児・1歳児・2歳児・3歳児・4歳児・5歳児というように、年齢あるいはクラスごとに区切った形式が多かった。保育所保育指針にある発達過程区分ごとに区切った形式や、いくつかの発達過程区分を合わせてひとくくりにした形式や、年齢をさらに細かく区分した形式、さらに独自に区分を決めた形式も見られた。

ほとんどすべての保育課程で、食育について養護や教育と同レベルの扱いをしていた。すなわち、生命の保持と情緒の安定や5つの領域に対応する覧には、「食を営む力の基礎」などという内容が書かれおり、養護、教育、食育が同じランクの扱いとなっていた。

⑤ その他

保育の内容覧の上には、用紙の向きを縦に使用した保育課程では、地域の実態とそれに対応した事業・行事覧を入れているものが多かった。用紙の向きを横に使用した保育課程では、「地域の実態とそれに対応した事業」欄と「主な行事」欄が分かれており、また「保育時間」欄を設けているものが多かった。保育の内容欄の下には、健康支援、環境・衛生管理、安全対策・事故防止、保護者や地域への支援、研修計画、小学校との連携、特色ある保育、地域の行事への参加、自己評価等の欄を設けている保育課程が多かった。しかしながら、中にはこのような欄を作りながら、空欄にしていた保育所も見られた。

上記の形式や内容を概観すると、全体として類似した形式や内容の保育課程が多かった。この点について、市販されている書籍を調べると、保育総合研究会（2008）による「プリプリ保育園平成〇〇年度 保育課程」には付録としてCD-ROMが付いており、その形式や内容は図1のようなものであった（スペースの関係で、縦や横に縮小している）。この形式や内容は、上記で多かった形式や内容と全く合致していた。この書籍では図1のようなエクセルのファイルが付いており、空欄を埋めるだけで保育課程が完成できるようになっていた。そこで多くの保育所がこの形式や内容に倣ったと考えられた。

保育理念 (事業運営方針)	子ども一人一人を大切に、……………						
保育方針	……………						
保育目標	……………						
社会的責任		人権尊重		説明責任		情報保護	苦情処理・解決
○……………		○……………		○……………		○……………	○……………
☆発達過程				☆地域の実態とそれに対応した事業・行事			
保 子 育 ども 目 標 の	0歳児	……………			3歳児	……………	
	1歳児	……………			4歳児	……………	
	2歳児	……………			5歳児	……………	
保育の内容							
年齢		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
養 護	生命の保持	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………
	情緒の安定	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………
教 育	健康	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………
	人間関係	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………
	環境	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………
	言葉	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………
	表現	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………
食 育	食を営む力の基礎	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………	○……………
健康支援		○……………	○……………	○……………	○……………		
環境・衛生管理		○……………	○……………	○……………	○……………		
安全対策・事故防止		○……………	○……………	○……………	○……………		
保護者・地域等への支援		○……………	○……………	○……………	○……………		
研修計画		○……………	○……………	○……………	○……………		
小学校との連携		○……………	○……………	○……………	○……………		
特色ある保育		○……………	○……………	○……………	○……………		
地域の行事への参加		○……………	○……………	○……………	○……………		

保育理念 (事業運営方針)	……………						
保育方針	……………			保育目標	……………		
☆発達過程とクラスの相関性		☆基本的社会的責任		☆地域の実態に対応した事業		☆保育時間	
……………		……………		……………		……………	
……………		……………		……………		☆主な行事	
……………		……………		……………		……………	
子どもの 保育目標	0歳児	……………	2歳児	……………	4歳児	……………	
	1歳児	……………	3歳児	……………	5歳児	……………	
保育の内容							
年齢		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
養 護	生命の保持	……………	……………	……………	……………	……………	……………
	情緒の安定	……………	……………	……………	……………	……………	……………
教 育	健康	……………	……………	……………	……………	……………	……………
	人間関係	……………	……………	……………	……………	……………	……………
	環境	……………	……………	……………	……………	……………	……………
	言葉	……………	……………	……………	……………	……………	……………
	表現	……………	……………	……………	……………	……………	……………
食 育	食を営む力の基礎	……………	……………	……………	……………	……………	……………
健康支援				研修計画			
……………				……………			
環境・衛生管理				特色ある保育			
……………				……………			
安全対策 事故防止				町への行事参加			
……………				……………			
保護者・地域 への支援				自己評価			
……………				……………			

図1. 保育総合研究会(2008)が提案する書式(一部改編)

6. 「言葉」の領域に焦点をあてた保育課程の分析

(1) 年齢別の分析

先に述べたように、保育の内容に関しては、年齢ごとに領域別の「ねらいや内容」を記述している保育課程が多かった。そこでここでは、年齢ごとに「言葉」の領域に記された「ねらいや内容」を分析する。

各年齢の言葉の領域に記述された内容を調べたところ、いずれの年齢でも、多くの保育所が共通した記述を用いていた。それをまとめたものが表5である。これは保育総合研究会（2008）による「プリプリ保育園 平成〇〇年度 保育課程」をそのまま用いた記述であった。

表5. 各年齢で多くの保育所が共通して挙げた内容

0歳児	語りかけられることにより声を出したり応えようとする
1歳児	話しかけややり取りの中で声や言葉で気持ちを表そうとする
2歳児	生活や遊びの中で簡単な言葉でのやり取りを楽しむ
3歳児	友達の話を聞いたり保育士に質問したり 興味を持った言葉によるイメージを楽しむ
4歳児	保育士や友達との会話を楽しみ相手に伝わるように話す工夫をする
5歳児	人の話を聞いたり身近な文字に触れたりして言葉への興味を広げる

しかしながら、これらの記述を同一のもののみならず、各年齢で繰り返し記述されるキーワードが特定できる。それをまとめたものが表6である。この表からは、保育所が各年齢の乳幼児のことばの発達をどのようにとらえているのかや、各年齢でどのように環境を整えて言葉を伸ばそうとしているのかがわかる。すなわち、保育所では、0歳児では語りかけること、応答的に関わることを通して、喃語、発声、発語の意欲を伸ばそうとしていること、4歳児では絵本・童話・物語などに接する機会や会話の機会を増やして、言葉で伝える楽しさを味わわせようとしていることがわかる。

表6. 各年齢で共通に見られたキーワード

0歳児	語りかけ、応答、喃語、発声、発語の意欲
1歳児	やりとり、声や言葉、二語文、気持ちを表そうとする、伝えようとする
2歳児	保育士を仲立ち、生活や遊びの中で、簡単な言葉、やりとりを楽しむ
3歳児	絵本、友達の話を聞く、保育士に質問する、生活に必要な言葉、言葉によるイメージ
4歳児	絵本・童話・物語、会話、言葉で伝える楽しさ
5歳児	絵本・物語・視聴覚教材、文字、人の話を聞く、適切に言葉を使う

(2) 言葉の領域に詳細な記述があった保育課程

図2は、提供された保育課程の中で、それぞれ「項目別のねらい」と「領域内項目」について、最も詳細に言葉の領域の発達が記述されていたものの一部を示したものである。図2上では「項目別のねらい」として〈活動〉を示したが、この他にも、同程度の詳細さで、〈構造〉と〈生活〉がある。そしてこれら3つ（活動、構造、生活）が、領域内項目としての「言葉の活動」、「言葉の構造」、「言葉の生活」に対応している。さらに、「領域内項目」として、挨拶、要求語、返事、表現、伝達、想像、絵本、創造、感動という8つの項目も別に設定されており、それぞれに対する子どもの姿も記されていた（図2下）。

このような詳細な記述は、当該保育所では、それぞれの発達過程区分でどのような関わりがなされるかを示すものである。例えば、0歳児に関して、「言葉の活動」に「喜んで音楽を聞く」とあるので、音楽を聞かせるような関わりをしているとわかる。また、「返事」に「名前を呼ばれると手を挙げる」とあるので、名前を呼ぶ関わりや、呼んだ後に、手を添えて、手を挙げさせるような関わりをしていることがわかる。

項目別のねらい	0歳	～	1歳	～	2歳	～	3歳	～
<活動> ・身近な人との関りの中で知っている言葉を使って自分の気持ちや経験したことを表現したり、人の話を聞くことを喜ぶ。 ・絵本や物語などに親しみ、想像力を豊かにしていく。	・歌、手遊びに喜んで手足を動かしたり声を出したりする。 ・音楽を喜んで聞く。 ・絵本や音楽など興味のあるものに耳を傾ける。	～	・手遊びや歌の語尾など所々あわせて歌う。 ・独り言を楽しむ。 ・リズムカルな繰り返しのある話、音を聞いて模倣する。 ・絵本やお話の中ででてくる簡単なセリフを模倣し、保育者と一緒にやり取りを楽しむ。	～	・簡単な歌を歌う。 ・好きな歌を何度も聞いたり口ずさんだりする。 ・保育者の素話を聞く。 ・簡単な劇遊びをする。 ・絵本や紙芝居などを楽しんで見たり聞いたりする。	～	・絵本や童話などの簡単な内容が分かりイメージを持って楽しんで聞く。 ・ごっこ遊びの中で日常会話を楽しむ。 ・興味のある言葉を使って遊ぶ。 ・聞いた話から簡単な劇遊びをする。	～

領域内項目	領域別の視点	項目別のねらい	0歳	～	1歳	2歳	～
言葉		①生理的欲求を泣いたり、言葉で表現したりする。	・バイバイと手を振ったり	～	・「おはよう」「さよう	～	・「お帰り」「かなるが言お
挨拶		②自然現象や事物に対しての感情を、身振りや言葉で表	・「アア」と欲しい玩具を指差す。	～	・「ハイ」と返事をする	～	・「ハイ」と返事をする
要求語		③人との関わりの中で自分の思ったこと、感じたことを身振りや言葉で表現する。	・嬉しいこと楽しいことがあると「キャッキャッ」と笑ったり喃語を発する。	～	・保育者の発音・言葉を真似る。	～	
返事		④ペープサートや人形劇や劇遊びなどことばで表現する。		～		～	
表現				～		～	

図2. 言葉の領域において最も詳細に記された保育課程の一部

考 察

本研究で得られた主な結果は次の2つである。

- (1) 保育所保育指針施行後半年の時点では、保育課程を編成している保育所の割合は高くない。編成しているところでも画一的なものが多い。編成時に保護者の意向を把握することや編成された保育課程における保育の内容を評価することは、まだ進んでいない。
- (2) 保育課程における「言葉」の領域の記述には、適当なキーワードが年齢ごとに存在する。また保育課程の詳細な記述は、その領域における子どもの発達を支援する関わり方をも示すものとなる。

以下では、これらについて考察する。

1. 保育課程編成の実態 保育課程を編成している保育所の割合が高くなかったことについては、情報不足が一因であろう。本研究は小椋・清水・鶴・南（2010）の報告書の一部であるが、その資料として添付したpdfファイルは、この情報不足を補う上で役立つと思われる。今後、定期的にこのような調査を実施して編成を支援するか、あるいは編成した各保育所が保育課程を公開することによって、編成率は高くなっていくと思われる、

編成の内容が画一的であったことは、2つの点で保育所の将来を懸念するものである。その1つは、保育所保育指針に「各保育所」による編成が強調されている点である。例えば、保育課程が全く同じ内容である2つの保育所があったとしよう。この2つは法の上から見れば、同一の保育所と判断されかねない。すなわち一方を他方の分園として捉えても、全く支障がないことになる。一方を他方の分園とすれば、保育所長は一人で済む。人件費がかからないのである。このように考えるならば、特に公立保育所の場合は、完全に同じ保育課程で保育を行う事で、例えば〇〇市立保育所△△分園として、保育所長を1人配置するだけで運営が可能になる。

もう1つは、保育所の職員間で、様々なことに対して共通理解が得られない可能性があることである。保育課程が画一的になった理由が、特定の保育士等がこの原案を作成し、承認を得る形で編成されていたためであるならば、保育課程作成を機とした共通理解は得られないと考えられる（保育課程を共通理解のもとに編成したある園の編成の成果について筆者らは調査を行ったが、その結果は稿をあらためて報告したい）。保育課程の編成は結果ではなく、その過程に保育士の資質向上、並びにそれに基づく保育の質の向上につながる要因が含まれていると思われる。

当該保育所の保護者の意向を把握した上で、保育課程を編成するように、「保育所保育指針解説書」には書かれている。具体的には、「保育課程編成の手順について（参考例）」に2）として「各保育所の子どもの実態や子どもを取り巻く家庭・地域の実態および保護者の意向を把握する」と書かれている。ここでは次の2点に注目したい。その第1は、この参考例の上に、「保護者の思いを受けとめ、保育課程に反映するかどうかなど検討することが求められますが、子どもの最善の利益を第一義にすることが前提です」とある点である。保護者の意向や思いは、たとえ把握したとしても、必ずしも保育課程に直接的に反映しなくてもよいと読み取れる。もう1つは、「保育課程編成の手順について（参考例）」の3）に「各保育所の保育理念、保育目標、保育方針等について共通理解を図る」とある点である。「各保育所の子どもの実態や子どもを取り巻く家庭・地域の実態および保護者の意向を把握する」が2）、「各保育所の保育理念、保育目標、保育方針等について共通理解を図る」が3）であることは、保育の理念、保育目標、保育方針等に、保護者の意向が反映されていると主張することができる。このように、「保護者の意向を把握した上で、保育課程を編成する」ことには、「保育所保育指針解説書」の記述に混乱があり、誤解を招く可能性がある。

評価に関しては、「言葉」の領域における記述に関する分析結果に照らして、以下で具体的に述べる。

2. 保育課程における「言葉」の領域の記述 本研究では、保育課程における「言葉」の領域の年齢ごとの記述に見られるキーワードを明らかにした。このキーワードは、旧保育所保育指針や保育所保育指針解説書に示されている子どもの発達の姿、並びに発達心理学のテキスト等に現れる各年齢に相当する子どもの発達の姿にほぼ合致している。このキーワードこそが、保育所における乳幼児の言葉の発達を捉え方であり、言葉を伸ばすための保育所における関わりであると思われる。

本研究では、言葉の領域に焦点をあてたが、他の領域に焦点をあてて同様の分析をすることによって、保育所におけるその領域の乳幼児の発達を捉え方や関わり方を推測することができる。これらについては我々の報告書（小椋ら，2010）では触れていないが、提供された保育課程は、すべてpdfファイルで当該報告書に添付しているので、誰もが分析することが可能である。

保育課程における詳細な記述からは、その領域における子どもの発達を支援する関わり方が推測できた。このことについては、Bruer（1993）による次の説が様々な示唆を与えてくれる。すなわち「どのような発達段階があり、各段階がどのように違うかを、認知科学レベルの詳細さを持って知ることができれば、ある段階から次の段階へと子どもが進むのを支援するような指導を工夫することができる」という説が、多くの示唆を与えてくれる。Bruerは認知科学という研究領域を持ち出したが、本研究からは保育課程の詳細な分析が子どもの発達を支援するような指導の工夫につながると考えられる。

保育課程の分析は、保育者の養成教育にも次のように貢献する。すなわち保育課程の分析結果をもとに保育者の養成教育を行えば、保育所では子どもの発達をどのようにとらえているのか、その捉え方に基きどのような関わりをしているのかを理解した保育者を養成できる。その際、保育課程が詳細なものであればあるほど、発達の姿や関わりは具体的に理解できるであろう。

最後に、このような記述の分析と、保育課程、さらにこれに基づく指導計画および保育実践の評価との関係について議論する。本研究では、保育課程から当該保育所における乳幼児の発達を捉え方や関わり方が推測できることを示した。さらに保育課程の詳細な記述とその分析は指導の工夫につながると論じた。この点をさらに発展させた保育課程を入手したので紹介する。なお、この保育課程は、本研究の調査実施後にある自治体が完成させたもので、本研究のために提供されたものではないこと、許可を得て紹介するものであることを記しておく。

図3は、ある自治体が編成した保育課程を「言葉」の領域に焦点をあてて分析したものである。完全ではないが、ある程度対応させて並べてみた。横に見ると、必要な環境や関わり方が見えてくる。

例えば、一番下の並びを見てみよう。絵本を介した関わりや準備すべき絵本がわかる。0歳児クラスでは「③保育士等と一緒にきれいな色彩のものや身近な物の絵本を見る」となっており、きれいな色彩の絵本や身近な物の絵本を子どもに見せることが求められる。1歳児クラスでは「⑤興味のある絵本を保育士等と一緒に見ながら、簡単な言葉の繰り返しや模倣をしたりして遊ぶ。」となっており、簡単な言葉の繰り返しができるような絵本が必要になる。2歳児クラスでは「④遊びや絵本等の中で言葉を交わすことの喜びを感じ、共通したイメージを持って遊びを楽しむ。⑤絵本や紙芝居を楽しんで見たり聞いたりし、繰り返しのある言葉や、簡単なストーリーを理解して楽しむ。」となっており、共通したイメージを持つために何度も同じ絵本を読むことや簡単なストーリーのある絵本を準備する必要があることが示唆されている。以下、同様に3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスの関わりも読み取れる。各クラスの年間の指導計画に、これらの絵本の準備や関わり方が反映されているかどうかの評価の視点となる。

この自治体は、編成した保育課程を元に、子どもの発達経過を記録するための記録表を作成している。その一部を示したものが図4であり、図5は「言葉」の領域に焦点をあてて、記録票の項目抽出したものである。このような子どもの発達経過の記録は、以下のように考えることで、保育課程を見直すのに活用できる。すなわち、保育課程に基づいて指導計画を作成し、その計画にそって保育を実施する。そして、すべての子どもについて、このような様式を用いて発達の経過を記録する。その上で、多くの子どもに適切な発達の経過が見られない場合、その原因として

	0歳児クラス	1歳児クラス	2歳児クラス	3歳児クラス	4歳児クラス	5歳児クラス
ねらい	<p>①泣いたり笑ったりする子どもの状態に優しく応え、発声にตอบสนองしながら喃語を育む</p> <p>②優しく語りかけたり、発声や喃語にตอบสนองしたりして、発語の意欲を育てる</p> <p>③絵本、玩具などに興味を持って、それらを使った遊びを楽しむ</p>	<p>①保育士等の話しかけや、発語が促されたりすることにより、言葉を使うことを楽しむ。</p> <p>②遊びの中で言葉を交わしたり、思いを受け止めてもらうことに喜びを感じる。</p> <p>③保育士等を仲立ちとして、絵本、玩具などに興味を持ち、それらを使ったあそびを楽しむ。</p>	<p>①自分のしたいこと、して欲しいことを言葉で表現する。</p> <p>②経験したことを思い浮かべたりして、ごっこ遊びを楽しむ。</p> <p>③遊びの中で言葉を使うことや、言葉を交わすことを楽しむ。</p> <p>④「なにこれ」などの質問や、言葉のやり取りを通して、自己表現をする。</p> <p>⑤簡単な絵本・紙芝居・お話などを見たり、聞いたりしてその内容を楽しむ。</p>	<p>①生活に必要な言葉がある程度分かり、したいこと、して欲しいことを言葉で表す。</p> <p>②人の話を聞いたり、自分の話を聞いたり、自分の経験したことや思っていることを話したりして、言葉で伝える楽しさを味わう。</p> <p>③絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして、その内容の面白さを楽しむ。</p>	<p>①自分で考えながら、自分の気持ちを表現したり、友達とのつながりを広げる。</p> <p>②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</p> <p>③絵本、童話、視聴覚教材などを見たり聞いたりして、イメージを広げ、言葉を豊かにし、ごっこ遊びや劇遊びを楽しむ。</p>	<p>①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。</p> <p>②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</p> <p>③日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、保育士等や友達と心を通わせる。</p>
内容	<p>①子どもに優しく語りかけをしたり、歌いかけたり、泣き声や喃語に応えながら、保育士等とのかわわりを楽しいものとする</p> <p>②喃語や片言を優しく受けとめてもらい、初語や保育士等とのやり取りを楽しむ</p> <p>④大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉がわかる</p> <p>③保育士等と一緒にきれいな色彩のものや身近な物の絵本を見る</p>	<p>①保育士等の話しかけを喜んだり、自分から片言でしゃべることを喜ぶ。</p> <p>②言葉で表せないことは、指差しや身振りで身近な人に自分の意思を伝える。</p> <p>③生活に必要な簡単な言葉を聞き分ける。</p> <p>④「自分で」「いや」と強く自己主張する自我を出しながら、自分のことを自分でしようとする。</p> <p>⑤興味のある絵本を保育士等と一緒に見ながら、簡単な言葉の繰り返しや模倣をしたりして遊ぶ。</p>	<p>①生活に必要な簡単な言葉を聞き分け、また、様々な出来事に関心を示し言葉で表す。</p> <p>②保育士等や気の合う友達と一緒に簡単なごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。</p> <p>③遊具や玩具などを実物に見立てたり「〇〇のつもり」になって、日常生活の言葉を使って、ままごとなどの簡単なごっこ遊びを行う。</p> <p>④遊びや絵本等の中で言葉を交わすことの喜びを感じ、共通したイメージを持って遊びを楽しむ。</p> <p>⑤絵本や紙芝居を楽しんで見たり聞いたりし、繰り返しの言葉や、簡単なストーリーを理解して楽しむ。</p>	<p>①保育士等に話しかけられたり、問いかけられたりしたら、自分なりの言葉で返事をする。</p> <p>②自分の思ったことや感じたことを言葉に表し、保育士等や友だちと言葉のやり取りを楽しむ。</p> <p>③興味を持った言葉を、面白がって聞いたり言ったりする。</p> <p>④保育士等にいろいろな場面で、なぜ、どうして、などの質問をする。</p> <p>⑤友だちとの会話を楽しむ。</p> <p>⑥挨拶や返事など生活に必要な言葉を使う。</p> <p>⑦ごっこ遊びの中で、日常生活での言葉を楽しんで使う。</p> <p>⑧絵本や物語などの内容がわかり、イメージを持って楽しんで聞く。</p>	<p>①保育士等に話しかけられたり、問いかけられたりしたら、自分なりの言葉で返事をする。</p> <p>②保育士等と一緒にごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。</p> <p>③身の回りの出来事に関する話に興味を持つ。</p> <p>④見たことや聞いたことを話したり、保育士等の話を親しみをもって聞いたりする。</p> <p>⑤したいこと、してほしいことを言葉で言ったり、わからないことを尋ねたりする。</p> <p>⑥考えたこと、経験したことを保育士等に話したり、友達に話したりすることを楽しむ。</p> <p>⑦日常生活に必要なあいさつをする。</p> <p>⑧生活の中で言葉の面白さに興味を持つ。</p> <p>⑨絵本や物語などを読み聞かせてもらい、その面白さがわかって、イメージを広げる。</p> <p>⑩日常生活に必要な簡単な文字や記号に関心を持つ。</p>	<p>①保育士等の応答的な関わりや話かけにより、自ら言葉を使おうとする。</p> <p>②保育士等と一緒にごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。</p> <p>③保育士等や友達の話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。</p> <p>④したこと、見たこと、聞いたこと、味わったこと、感じたこと、考えたことを自分なりに言葉で表現する。</p> <p>⑤したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、わからないことを尋ねたりする。</p> <p>⑥人の話を注意して聞き、相手にわかるように話す。</p> <p>⑦生活の中で必要な言葉がわかり、使う。</p> <p>⑧親しみを持って日常の挨拶をする。</p> <p>⑨生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。</p> <p>⑩いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。</p> <p>⑪絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。</p> <p>⑫日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。</p>

図3. ある自治体の保育課程に現れた「言葉」の領域のねらいと内容

発達経過記録票

児童名	男女	生年月日	年	月	日	記録者
領域	1～2歳児観察内容	月齢	2～3歳児観察内容	月齢	3～4歳児観察内容	月齢
健康	こぼしながらもスプーンを持って食べる 一つ一つの味がわかる		手づかみ、またはスプーンを使って意欲的に食べる いろいろな食べ物を進んで食べる		スプーン・フォーク・箸の使い分けができる いろいろな食べ物を「美味しい」と感じて食べる	
(食事)	食べ物をよくかんで食べることを知る		食べ物をかんで食べることができる		かんで食べることに慣れる	
	手洗いや顔をふかれることを嫌がらない		食前食後の挨拶や手洗いができる		一人で食事ができ、簡単なマナーを身につける	
	自分で食卓につき食事が出されるのを待つ		ランチルームで、落ち着いて食事を楽しむことができる		保育者や友達と一緒に食事の場を整える	
	否なものや慣れない物でも少しずつ食べる		好きなものばかりを先に食べない		主食、副食を知り、交互に食べようとする	
よく遊び、よく眠り、食事を楽しむ		おやつや給食の匂いに気づき食事を期待する		保育者と一緒に簡単な調理ができる		
安心できる保育者のもとで、喜んで食べる		一緒に食べる人に関心を持って食べる		調理を作る人に親しむ		
排泄の有無を表情で知らせる		おむつやパンツがぬれたら動作や簡単な言葉で伝える		排泄は自分で行きたい時に行く		

図4. ある自治体が保育課程に基づき作成した発達経過記録票

	1～2歳児観察内容	2～3歳児観察内容	3～4歳児観察内容	4～5歳児観察内容	5～6歳児観察内容
言葉	大人の言うことがわかるようになる	生活に必要な言葉を聞き分ける	生活に必要な挨拶ができる	日常の挨拶や簡単な伝言、応答ができる	日常の挨拶、伝言、質問、応答、報告が上手になる
	名前を呼ばれたら返事をしたり、自分の名前を愛称で言う	自分の名前が言えたり保育者や友達の名前を言う	自分の家族の名前が言える	身近な出来事や家庭での出来事を話す	日常会話が豊かになり、生活に必要な言葉を適切に使う
	したい事やして欲しい事を身振りや言葉で伝えようとする	したいこと、して欲しいことを言葉でいう	自分の要求を保育者や友だちに伝えることができる	友だちとの会話を楽しむ	みんなで共通の話題について話し合うことを楽しむ
	絵本の中から知っているものを見つけて喜ぶ	絵本などで言われたものの指さしができる	いろいろな場面で、なぜ、どうしてなどの質問をする	見たこと聞いたこと、疑問に思ったことを話す	考えたこと経験したことを順序よく話す
	簡単な言葉の繰り返しや模倣したりして遊ぶことができる	簡単な言葉の意味がわかる	相手の話を聞こうとしたり、簡単な内容がわかる	自分の思いを話したり、相手の話を聞くことができる	人の話を注意して聞き、相手にわかるように話す
	簡単な事物の名前が言える	様々な出来事に関心を示し、言葉であらわす	興味を持った言葉を、面白がって聞いたり言ったりする	童話や詩を見たり聞いたりして言葉の面白さに興味を持つ	童話や詩などの面白さ美しさに気づき自分でも表現する
	興味ある絵本を保育者と一緒に見ることができる	絵本や紙芝居を楽しんでみたり聞いたりできる	絵本や童話の内容がわかり、楽しんで聞くことができる	絵本童話に親しみその面白さがわかる	絵本、物語の内容に興味を持ち、遊びの中で表現する
		保育所内の絵表示や文字に関心を持つ	生活に必要な簡単な文字や記号に関心を持つ	文字、記号に興味や関心を持ち、それを使って遊ぶ	

図5. ある自治体の保育課程に基づく「言葉」の領域の観察項目

①保育で不適当な関わりがあったこと、②指導計画が不十分であったこと、③保育課程が不適当であったことの3点を考えて、保育、指導計画、保育課程のいずれか、あるいはこれらの組み合わせを修正する。このような記録票を保育課程編成後に作成し、上記のように考えて保育しつつ保育課程を見直していくなれば、計画、実践、評価のよい循環ができる。そして、その循環を回しつづけることにより、子どもは伸び、保育士の資質は高まり、また保育所としても発展して行くであろう。

ところで、保育課程の編成は、平成21年から義務づけられたことであり、本研究で示されたように、様々な書籍（先述書の他に、例えば、阿部・前原，2009；保育とカリキュラム編集部，2009；川原，2009；全国保育士会，2009など）の出版が編成に影響を及ぼしている。また、そのような書籍に引きずられ、保育課程が机上の空論になっているかもしれない。このため保育課程の分析だけから、保育士がどのように考えているかについてや、実際に子どもに関わる際に何を重視しているかについてなどを推測することが危険であることが示唆される。この点については、今後の研究が待たれる。

文献

- 阿部和子・前原寛（2009）「保育課程の研究 子ども主体の保育の実践を求めて」萌文書林
- Bruer, J.T. (1993) "Schools for thought" 松田文子・森敏昭監訳（1997）「授業が変わる 認知心理学と教育実践が手を結ぶとき」北大路書房
- 保育総合研究会監修（2008）「新保育所保育指針サポートブック～保育課程から指導計画作成まで～」世界文化社
- 保育とカリキュラム編集部（2009）「新指針・新要領イラスト図解ガイド～保育課程の参考例も解説」ひかりのくに
- 川原佐公監修（2009）「新保育指針立案データ集」サーヴ
- 厚生労働省（2008）保育所保育指針解説書 フレーベル館
- 南 憲治（2008）小学生のひとり言についての心理学的研究：ひとりごとが発せられる状況による分析. 神戸親和女子大学研究論叢, 41, 121-126.
- 小椋たみ子（2008）シンボル機能の発達とその支援：言語発達の予測要因. 発達障害研究, 30(3), 164-173.
- 小椋たみ子・綿巻徹監修（2010 a）「2さいでであうことばえじてん」幻冬舎エデュケーション
- 小椋たみ子・綿巻徹監修（2010 b）「3さいでであうことばえじてん」幻冬舎エデュケーション
- 小椋たみ子・清水益治・鶴宏史・南憲治（2010）ゆたかなことばの発達を育む乳幼児の保育内容の研究 平成21年度児童関連サービス調査研究等事業報告書 財団法人 こども未来財団.
- 清水益治（2009）やりとりと学び 無藤隆・清水益治編著「保育心理学」89-97. 北大路書房
- 鶴 宏史（2005）子どもの自発性を重視した障害児保育実践：家族・他機関との連携を視野に入れた事例. 親和女子大学児童教育学研究, 24, 30-48.
- 全国保育士会編（2009）「実践から学ぶ保育所保育指針」全国社会福祉協議会

付記：本研究は平成21年度児童関連サービス調査研究等事業の一環として、財団法人こども未来財団の委託を受けて調査研究を実施された。本研究に御協力いただいた保育所、保育士の方々に厚く御礼申し上げます。